

## 小学生用主要 5 因子性格検査の製作

村上宣寛（富山大学人間発達科学部）

キーワード：小学生用 性格検査 ビッグファイブ

1980 年代に性格ビッグファイブ仮説が主流にな 名（男子 124 名、女子 107 名）であった。  
り、我が国でも 1990 年代から性格検査が開発さ  
れた。しかし、ほとんどは成人用である。村上・ 調査用紙 児童用質問紙の質問項目は、2 件法によ  
村上(1997)の BigFive は中学生以上で標準化され る 80 項目であった。その内訳は、問題攻撃性尺  
度 13 項目、BigFive を児童用に書き換えた 52 項  
は曾我(1999)の FFPC である。しかし、妥当性検 目であった。  
証はノミネート法を利用している。この方法は、  
担任に各因子に該当する者と該当しない者を選抜 教師用質問紙は、BigFive の性格特性を 5 つの下  
させ、尺度得点の有意差を調べる方法である。 位概念に対応して文章化したもので、5 段階評定  
FFPC はすべての尺度で有意差があった。したが を行った。  
って、妥当性はゼロではないが、妥当性数がどの  
程度の大きさであるかは不明である。 結果

性格検査は妥当性係数と信頼性係数を報告すべ  
きあり、FFPC はこの条件を満たしていない。本 児童用質問紙については、まず問題攻撃性尺度を  
研究の目的は妥当性の高い小学生用 5 因子性格検 除外し、その他の項目の「ハイ」と「イイエ」の  
査を作成することである。そのため、児童用の質 度数分析を行って 8 割を超えるものを除いた。ま  
問紙を実施すると同時に担任教師による性格評定 た質問紙の作成ミスで重複していた 3 項目を除い  
を行った。 た。次に児童の回答と教師の評定の相関係数を算  
出して有意な相関のある項目を残し、45 項目に因  
子分析を適用した。すると、5 因子構造は得られ  
たが、知性因子に属する項目が 5 項目しかなかっ  
た。それで、問題攻撃性尺度で BigFive と重複し  
ている 3 項目と、度数分析で除外した知性因子の  
2 項目を復活させ、48 項目に因子分析を適用した。  
固有値は、5.960、3.500、3.000、2.489、1.795、  
1.342、1.226、1.196、... と減少した。それで、  
因子数を 5 と定め、因子パーシモニー法によって

### 方法

参加者 富山県内の 4 つの小学校の 3～6 年生、計 905 名と担任教師 29 名であった。不応答が 3 項  
目以上の小学生を除くと、有効回答数は 815 名で、2 項目を復活させ、48 項目に因子分析を適用した。  
内訳は、3 年生 154 名（男子 77 名、女子 77 名）、4 年生 182 名（男子 88 名、女子 94 名）、5 年生 248 名（男子 128 名、女子 120 名）、6 年生 231

直交回転を行った。

因子分析による尺度構成では、各因子の因子負荷量の大きな項目を採用するが、この方法では、担任教師の評定値との相関が低くなってしまう。そこで、因子負荷量が大きく、かつ、評定値との有意な相関のあった項目を優先して採用した。このようにして、各因子 6 項目ずつで尺度を構成した。

尺度素点と担任教師の評定値との相関(基準関連妥当性)は、E で 0.230、A で 0.330、C で 0.159、N で 0.140、O で 0.190 とすべて 1 %水準で有意であった。妥当性係数はかなり低かったが、協調性では、ある程度の予測力はあると言える。

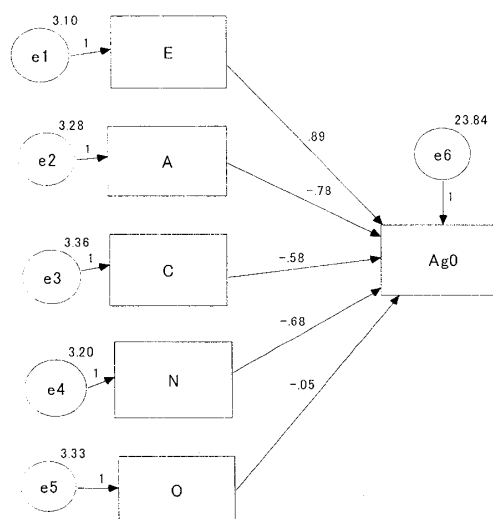
$\alpha$  係数は 0.654、0.700、0.701、0.695、0.704 とぎりぎり許容できる値であった。質問紙作成のミスから重複実施された項目間相関は、それぞれ 0.857、0.714、0.866 で、データを結合して相関を求めると 0.820 となった。再検査信頼性係数は未調査であるが、0.80 程度の信頼性係数は見込めると考えられる。

全 30 項目に村上・福光(2005)による問題攻撃性尺度 13 項目(2 項目が重複)を追加し、肯定率(否定率)が 80 前後を超える 6 項目を追加し、逆方向に加点し、頻度尺度とした。その結果、小学生用主要 5 因子性格検査(LittleFive)は計 47 項目となった。

問題攻撃性尺度 Ag で LittleFive と重複した 2 項目を除いて素点を求め、AMOS 5.0 による分析を行った。AGFI=0.744、RMSEA=0.191 とモデルは十分ではなかったが、適合していた。図のように E、A、C、N のパス係数が 1%水準で有意で、比較的大きかった。O のみが有意でなかった。

曾我・島井・大竹(2002)は FFPC と小学生用攻

撃性質問紙 HAQC の回帰分析を行い、A と敵意、E と短気と言語的攻撃の間に比較的大きく有意なパスを見いだした。FFPC と HAQC と測定尺度が異なっているので、単純な比較はできない。ただ、O のみは有意なパスがないという点は共通で、本研究では、E、A、C、N のパス係数がすべて大きいという点が異なっていた。



#### 引用文献

- 村上宣寛・福光隆 2005 問題攻撃性尺度の基準関連的構成とアサーション・トレーニングによる治療的介入. パーソナリティ研究, 13, 170-182.
- 曾我祥子 1999 小学生用 5 因子性格検査(FFPC)の標準化. 心理学研究, 70, 346-351.
- (注)この論文は筆者の指導の元で研究を行った富山大学教育学研究科畑山奈津子の修士論文(予定)のデータに基づいている。